

大阪大学教授・ロボット工学者

石黒 浩さん

まるで人間のようにふるまい、
会話ができるアンドロイド。

そんなSFのような世界を

現実にしたのが、ロボット研究を

とおして文部科学大臣表彰を

受賞した、世界的なロボット研究の

第一人者・石黒浩さん。

生まれ故郷の高島の自然の中での

原体験や、今の滋賀への思い、

そしてロボットと人間のこれからに

ついて語っていただきました。

田舎の風景と暮らしが
今の原点

高校までを高島市安曇川町で育

ちました。もう驚くほど自然が豊

かですね。山ではマツタケやシメジ

がどつきり穫れ、川で子どもが

獲ったアユがその日の食卓に上

りました。クワガタやホタルも湧

き出るくらいにたくさんいました

ね。夏は川や琵琶湖で泳ぎ、冬は

雪遊び。田舎そのものの風景と季

節に密着した暮らしは、今も鮮烈

な思い出です。

幼少期を過ごした安曇川では、

自然の中で自由に遊んだり、考え

たりする時間がたっぷりありまし

た。ビニールハウスでカブトムシ

を育てたり、ミジンコの増やし方

を研究したり…。人工的に作った

ものではない自然の中だからこそ、

自分で考え、手を動かして、疑問を

解決していく力が養われたと思いま

す。同時に「生命」について漠然と何

かを学んだ気がするんです。

そんな、自分の土台を育ててく

れた滋賀は、昔のような山や水、

ゆったりとした時間が流れる場

所であつてほしいですね。

人との距離が近い
ロボットを創りたい

転機は小学校5年生のとき。「人

の気持ちを考えなさい」という先

生の言葉でした。「人の気持ちは

どうすればわかるのか？」という

疑問を抱えたまま研究者の道に進

み、今なおぼくのアンドロイド研

究の基本課題となつていきます。よ

くロボットが好きだと思われん

ですが、実は人間が好きなんです。

今、自律型パーソナルロボットの

研究を進めています。人の意図

をくみながら対話できるロボッ

トが、ここ数年の間に普及するで

しょう。そのキーとなるのが「人

間とは？」という基本課題です。

それをどこまでも追求すること

が、人間とロボットが豊かに関わ

る近未来につながると思つてい

ます。

滋賀の自然の中で培った「考え、創る力」

「人間とは何か」を追求したロボット開発を



ERICA (エリカ)

2015年に発表された自律対話型アンドロイド「ERICA (エリカ)」。親しみやすい整った容姿に最新の技術を搭載。目の動きやしぐさで喜怒哀楽を表現でき、相手の言葉を認識して自然に対話ができる。©ERATO石黒共生ヒューマンロボットインタラクションプロジェクト



1963年高島市出身。

ロボット工学者。大阪大学基礎工学研究科教授(特別教授)。ATR石黒浩特別研究所客員所長。社会で活動するロボットの実現をめざし、知的システムの研究を行う。従来の産業用ロボットから、アンドロイド、ジェミノイドといった日常活動型ロボットを世界に先がけて開発。2014年、マツコ・デラックスさんをリアルに再現したマツコロイドを開発し、メディアでも大きな話題となった。



Present

石黒浩さんのサイン本
「アンドロイドは人間になれるか」
をプレゼント!

※プレゼントの詳細は
15ページほっとサロンにて